

すし、すこし高直にても徳なり、こしきうすきは、風あたりて、内なる物ぬくもりはやくさめて、大きなるそんなり、

〔窓の須佐美〕<sup>二</sup>味方が原の戦に、神君<sup>○徳川</sup>の御馬流矢にあたりたるまでにて、猶敵陣へ向ひ給ふべき御氣色なりしに、夏目左衛門我馬を給りて向ひ申べし、はやく御退おはしますべきよし申ければ、汝此馬に乗てあやまちあるべしと仰けれども、打乗て敵に向ひ働して討死しけり、其子に祿を給り、御側近く召仕、れけるが、ある夜同輩を討ければ、衆人騒ぎけるを、君は刀を持給ひて御尋あり、御臺所にて大釜の中へ追入られ、蓋をおほひ、その上に御腰をかけられ、尋ね來りたるものどもに、いまだ行衛しれざるやと御尋あり、とかく見えざるよし一統申ければ、彼等を退けられ、近臣ばかりに成て後、彼ものを御呼出し、只今はやく立退候へと仰ありければ、行衛しらずなりけり、年經て後召出され、本のごとく召仕はれけり、父が忠節に報い給ふ事と思はるゝと、人のかたりし、

〔令義解<sup>五</sup>軍防〕凡兵士毎火、<sup>○中</sup>小釜隨得二口、<sup>○中</sup>皆令自備、

〔置土産<sup>五</sup>〕都も淋し朝腹の獻立

草庵には小釜ひとつ、素湯わかして、かうせんより人をもてなす物はなかりき、

〔雲萍雜誌〕飯釜の賛に、萬釜に募るの勤めにおけるや、明けくいとま明なければ、飲食に乏しからず、人の世にある是とひとし、此もの、徳たる、孝に釜底の焦を削りて、冥理に湯の粉の洗ひながしを捨てず、驕はわづか茶飯に酒の半椀を加へ、儉はあまねく大根葉割麥の糧を守れり、日に琢磨の功成りて、ひかり家内の繁榮をてらす、

〔寶藏<sup>四</sup>〕飯釜

天竺には味の最上を醍醐味といひ、大唐には大牢といへり、我朝にはいづれをかいふ、わが毘を